

サハリン原産 幻のオキナグサ

札幌市 高橋 英樹

札幌市 東 隆行

園芸愛好家の間で表題のように謳われているのがサハリン固有の1属1種ヒトツバオキナグサである。ネットでは開花した栽培株の写真も見られ、1株5,000円前後で販売されている。『北方山草』でもこれまで何回か取り上げられ、1980年創刊号の巻頭には船崎光治郎の『図説樺太の高山植物上巻』(船崎1941)のヒトツバオキナグサの彩色図が掲載された。1991年のソ連崩壊を受けて比較的簡単にサハリン渡航ができるようになり、15号には船泊山(「川島山」)でのヒトツバオキナグサ発見記(小宮1998)が巻頭のカラー生態写真と共に発表され、その後もアプローチがしやすいサハリン中部チャンガ岳でのヒトツバオキナグサの写真が複数の雑誌に掲載されている(新川1999, 河原2005, 藤井2006)。本種の調査研究史は既に小宮(1998)で概略が述べられているが、北大に保管されている標本データと共に最近の分子系統研究の結果も含めて紹介したい。

ヒトツバオキナグサは、1935年の『札幌博物学会会報』第14巻1号の中で宮部金吾・館脇操がサハリン固有のキンポウゲ科の新属新種 *Miyakea integrifolia* Miyabe et Tatem. として発表した(Miyabe and Tatem. 1935)。属名は師・宮部金吾と共に『樺太植物誌』(宮部・三宅1915)を著した三宅勉への献名である。特徴的な全縁・単葉で常緑の根生葉の存在により、近縁のオキナグサ属 *Pulsatilla* から区別される独立属とされた。

タイプ標本は敷香支庁浅瀬川上流で1934年5月22日にN. Inouye(井上登; 小宮(1998)では井上昇とされる)が採集した開花個体で北大総合博物館植物標本庫(SAPS)に保管されている。Miyabe and Tatem. (1935)の解説では、南樺太の国境50度線付近の敷香支庁オホーツク海側の古生層の山岳(東サハリン山脈)で採集、とされた。井上が採集した標本が樺太庁博物館の菅原繁蔵に寄贈され、さらに研究のために宮部金吾・館脇操に送られたという。初発表論文では鐘形の花内部を見せるため、がく片を開いて押された押し葉標本の写真が掲載されている。開花期は5月下旬~6月下旬で、雪解け後すぐに開花するため生育地の雪解け状況により大きく変わる。結実期は開花後すぐだが一般には7~8月である。種子発芽は容易で、栽培も北海道では難しくない。

1934年の発見後、1935、36年には東サハリン山脈から続々と標本がもたらされ館脇自身も自生地を調査している。これにより宮部と館脇は1936年の論文で標本データを追加し、自生地での果実株の白黒写真(1936年6月21日川島山での撮影)を掲載し、さらに開花後に花柄(糸状に裂け輪生する茎生葉より上の部分)が花茎(茎生葉より下の部分)の2-3倍の長さに急速に伸長する点を新属の特徴として加えた(Miyabe and Tatem. 1936)。翌1937年に館脇は、牧野富太郎が顧問を務めた野外植物研究会会誌『野草』